# 佐渡のトキと自然と子どもたち

佐々木秀昭：提供

# トキを中心にした環境教育
## —佐渡版・行谷小
### —生き物と地域のつながりを学ぶ子どもたち

川上治男（行谷小学校長）さん
中島明夫（指導員）さん　に聞く

編集部

２０１１年11月中旬、行谷小学校（全校児童数75名、11年度）を訪ね校長の川上治男さんと中島明夫さん（指導員）にお聞きした。中島さんは、新潟大学職員で環境省外郭団体に所属し、トキに関わる仕事に従事していた時、島内の小中学校に「生きもの調査」を提起した方である。

（編集部）

## はじめに

行谷小は１９５５年代半ばから（昭和30年頃から）愛鳥の学校として、野鳥観察や学校林の巣箱設置などに取り組み、１９６５～６７（昭和40～42）年水害で傷つき保護されたトキ４羽を飼育し、日本で初めてトキを飼育した学校で知られる。以来「佐渡の空に再びトキを」を合い言葉にトキとの共生をめざす学習—野鳥観察、トキの生態調べ、ビオトープづくり、生きもの調べなどに取り組んできた。２００９（平成20）年、環境省・日本鳥類保護連盟主催「第43回全国野生生物保護実績発表大会」で環境大臣賞を受ける。

## 1、地域の「水辺の生きもの調べ」

### (1) どう取り組んでいるか

2001(平成13)年から、全校児童が自分たちの住む4つの地区(潟上、青木、長畝、田野沢・正明寺)に分かれ、田・用水路・川などの水辺に棲む生きもの調査を始める。どの地域のどんな水辺にどのような生きものがいるかを「生きもの地図」で示して、トキの棲む環境を明らかにする実践である。

それぞれ地区毎の子どもへの指導は、5〜10人のボランティア・ティーチャー(環境庁保護観察員・市役所職員・野生復帰をめざす農業者の会・JA職員など)が担当し、協力・支援している。また、慣れている上級生が下級生の面倒をみてくれる。

子どもたちに、捕獲の方法を教え、時には川で水浴びするなど楽しみながら生きものを捕まえるので、泥がついても生き生きと取り組む。以前は春・秋に2〜3回、最近は春に1回実施している。1・2年生は「生活科」、3年生以上は「総合的な学習の時間」をあてている。

### (2) どんな生き物が棲んでいるか

捕獲した生きものはバケツに入れ、観察はメッシュ(網)に入れて動かないようにして行う。生きものの名前を聞かれてもすぐには答えない。どんな所にいたか、目はどこに向いているかなどを聞き、教え込むのではなく気付かせるように、子ども主体の学習をすすめる。最近は名前をすぐに尋ねなくなった。よく見てスケッチし、写真を撮るなどして、文化祭にこれまで調べたものとの比較や減少した生きもの調査を展示・発表する。

最近5ヶ年間調べた水辺では、アマガエル、ドジョウ、タモロコ、サワガニ、カワニナ、ドブガイなど、草原ではトノサマバッタ、カマキリ、カナヘビなどが見られた。他にニホンジネズミなど、鳥のえさとなる虫や魚など90種類以上見つかっている。

5年生の社会科で2008(平成20)年から、学校田を農薬や化学肥料を使わない田んぼにしてイネづくりを始めた。田植え、草刈り、稲刈りの農作業やイネの観察を行っている(水管理は近くの農家の方に依頼)。ここでは、コナギ、イヌビエなどの雑草が多く生え、ミジンコやエラミミズが増え、モノアラガイ、シオカラトンボ、ドジョウ、メダカ、アメンボ、ガムシ、マ

ツイモシなど多くの種類が見られた（第43回全国野生生物保護実績発表大会資料「佐渡の空に再びトキを」2008年度）。

（3）トキの生活と生きものとの関係

2008（平成20）年、放鳥されたトキの居所を知るために、児童たちはトキを見かけた場所を地図に記している。さらにどんな過ごし方をしているか、佐渡トキ保護センターの専門家から学んでいる。例えば、繁殖期には羽が黒くなることや好物のドジョウ、カエルの他ミミズやバッタを食べることが分かった。メジロやカラスと違って、トキのくちばしは神経が通っていてどろどろの中のえさを感じ取って食べることや松や杉の枯れ木にも止まり、枯れ木の大切さも理解できた（前掲資料）。

警戒心の強い鳥だが、学校で飼育していたときは人の腕に乗るほどであったという。

## 2、トキに関わる学校イベント

（1）トキの森公園で「トキ集会」

4月、全校児童はトキの森公園に集い、先輩が作成した「行谷小学校トキの歌」を合唱する。トキの野生復帰のための募金を保護センター長に寄附し、公園内の清掃を行う。トキのことがよく分からない1～2年生はえさや必要な環境について自然観察員（センター職員）から説明を受ける。

また、5月には学校の周りにはどんな鳥類が住んでいるか、希望する親子で探鳥会を行う。

（2）トキ解説員として訪れる学校・観光客に説明

3年生以上の児童は、自分たちが学んだトキの生態、野生復帰のトキの環境について、トキを観察できる「トキの森公園・トキ資料展示館」で修学旅行中の小学校生（10年～11年度福島・会津、新潟市、柏崎市、長岡市）や、夏休みには（一人1回以上）観光客に説明をし、交流を図っている。

06年以降3ヵ年で、延べ3000人の観光客と修学旅行生に説明している。

また、中国との交流も盛んで、1998（平成10）年トキ友好使節団、99（平成11）年、中国洋県使節団が来校し、行谷小学校からも中国を訪問する。08（平成20）年に中国朱鷺湖小学校と習字作品を交流。

## まとめ

「佐渡の空に再びトキを」を合い言葉に、40年以上に亘ってトキを中心に子どもたちに環境教育をすすめてきた。数年で教員の学校異動があり、ややもすると、学校教育の継続課題は途切れ易い。

にもかかわらず、これだけ長い間、環境教育の課題を継続できているのは、地域の惜しみない学校への支援があってのことに他ならない。まさに地域に開かれた小規模学校だからこそ可能となる実践ではないだろうか。

いま、佐渡島では農薬と化学肥料を3割から5割減へと推し進め「佐渡トキ米」の販売に力を注いでいる。トキの棲める環境が安全・安心の食料を提供することに深く結びつく。子どもたちはトキと共生する環境づくりの認識を深め、佐渡島からその声を発信している。

資料

・『トキをみた』地域の人の声」、佐渡トキファンクラブ
・「ぼくたちみんなでできること」コニカミノルタ
・「行谷小学校の沿革」学校要覧

（文責・内山雄平）

行谷小学校での「総合的な学習の時間」の授業（中島明夫：提供）